

沖

俳句雑誌[おき]

4月号

沖 発行所

駅

隴

能村 研三

二列車を通過待ちせる駅隴

刃物屋の間口開き過ぎ春寒し

うかうかと正客となる桃の日に

車座に賜ふ落味噌旅にゐて

「坂の上の雲」の子規

NHKが何年かにかけて放映した司馬遼太郎の「坂の上の雲」、テレビでは時間が合わなかったのだから出て来なかったが、娘が揃えてくれたDVDで時間がある時に見ている。一巻が一時間半かかるので、毎日連続して見ることは出来ないが、先日ようやく第七巻の「子規逝く」を見ることが出来た。

このドラマは松山に生まれた秋山好古・真之の兄弟と、正岡子規との交友が描かれたものだが、香川照之が演じる子規が病と闘いながら、大勢の人を家に呼んで編集会議をするシーンがあった。そこには高浜虚子や河東碧梧桐もいて、妹の律は子規の看病や身の回りの世話をして、完全に子規の手足としてつくした。子規は鏡で律の居所を常に探していた。「新聞日本」の陸羯南が娘二人と一緒に、朝顔を持ってきてくれる。子規は「病床六尺」「草花帖」などの作品を作り続けるが、一人である子規は苦しさのあまり、ノミで自分を突こうとするが、これが出来ず、母の八重が帰ってくると、子規は何もなかった風を装う。

箱折りの折目正しくうららけし

堀越しに野太き笑ひ春夕べ

みぞれ雪空苾菜の炒めもの

耳の日に情報共有してゐたり

潮音の高鳴りに沿ひ雛の家

普段着を洗ひ干し着る梅日和

幕末の開国から三十年も経たない
時期に、多くの志のある男たちが広
い分野で真実を求めながら交流を重
ねていく姿は、今の現代社会には欠
乏しており、この時代の人達の真摯
で純粋な思いに感動を覚えた。

ところで子規は、また浅井忠、中
村不折ら洋画家とも親しく交流し、
子規の文学の根本をなす「写生」の
理論も、彼らとの交流の中で育まれ
たといわれている。これは、過去の
因習や主観を捨て、目の前に見える
ものの客観的な描写によって、真実
に到達しようとする思考のあり方で
あり、明治という時代の精神を象徴
するものといえるのだろう。

松山には何度か行っているが、子
規記念館や坂の上の雲のミュージア
ムをまだ訪ねたことが無いので、是
非機会を得て訪ねてみたいと思っ
ている。

能村 研三



蒼茫集



家族ゆゑ

荒井千佐代

舟波にときをり目覚め浮寝鳥
焚火猛れば海峡の闇深む
冬銀河遺髪と為すに短くて
煤逃げの図書館族となりにけり
初明かりこの世の端に寝起きして
家族ゆゑかたまつて生く露の臺

五百号へ

千田百里

竜天に登るやいよよいよ五百号おへ
しやばん玉吹く目が先に宙へ飛ぶ
春潮や垂との領巾振る夫婦岩
三寒のまた三寒の久女の忌
啓蟄や夫よりあそび上手かも
東京に背を向け春のひなたぼこ

房州路

久染康子

水口に来て薄氷の立ち上がる
野焼あと棘あるものの燃えしぶる
天地を花菜ばかしの房州路
岬かぜ御して高舞ふ青鷹
隣席は菜めし弁当久留里線
築地塀谷津の舟より芽吹き銀杏の仁王立ち

さつと煮

田所節子

鳶が空均す水仙日和かな
ぐい呑みに出すさつと煮の山椒の芽
自家製てふ優しき味や露の味噌
佐保姫の輿かも黄金色の雲
冬帝のまなざしやさし陽の木椅子
餅搗や昔は社宅総出して

ふはり 辻美奈子

体温の重さふはりと猫の子や
雛市の猫の香箱座りかな
つくしんぼ生うてすこしく前のめり
巢立つ軽さと発たしむる清しさと
光年を近しとおもへ春の星
三月が来る潮鳴りを闇に聞き

引 力 宮内とし子

引力のとどかぬ世界滝凍つる
きさらぎの顔を包める蒸しタオル
洗顔の泡のふくらむ寒の明
回し挽く胡椒の香り春兆す
一茶句碑据ゑて大樹の芽吹き急
骨片は太古の矢尻かぎろへり

予 約 席 辻 直 美

練り直す朱肉の篋や寒明くる
節分や飛行船より音洩れて

花種蒔く半年先の予約席
建国記念日押花は上出来で
蒔き終へてちよつと覗いて種袋
かの大樹いま囀りの木となれり
矢 面 細川洋子

大寒の矢面に立つ耳朶ふたつ
羊皮紙の彩色海図あたたかし
閑職の裸木ばかり見ゆる席
張りのあるかの声二月礼者来る
とび箱の五段跳べたよ山笑ふ
一の午願王子橋石ひの石を持ち上ぐる

ク拉斯会 北川英子

冬帝も帰路見失ふ白世界
前傾の縦一列や深雪路
冬麗の記憶合せのクラス会
霜晴の墓標きらきら待ち呉れし
冬ざれや失ふものなき強さ
日脚伸ぶこんななに小さき靴も客

暁 紅

遠藤真砂明

ラグビーの瞬のいのちをぶちかます
合掌の阿修羅を見たりどんだの火
寒牡丹朝日身ぶるひして昇る
しりもちの子に大根のすつば抜け
声高らかに大灘の鬼やらふ
暁紅の男富士かな冬終る

去年の記憶

千田 敬

この冬もひと日となりて憎からず
春怒濤去年の記憶を揺るがしめ
春浅く花舗のホースはとぐる巻
えんぶりや鉦や太鼓や舞ふ雪や
愛のことばひと斬ることば魚は氷に
啓蟄の夢の入口石舞台

日は西に

安居正浩

長男の二月礼者のごと来る
日は西にはうれん草はお浸しに
春めくや七人の敵どこにゐる
引く波の未練たらたら春渚
鬼やらひ息切れしたる鬼であり
金星に言ひ寄りられたる春の月

裏部屋

菅谷たけし

熱爛やどこかでねぢれたる話
幼な日の記憶澄みだす独楽の芯
霜晴義師87歳ぞ黄泉路ゆつくり歩まれよ
水仙や喪の裏部屋の明るくて
朱儒どちの祝祭めいて霜柱
昇竜のやうな夕雲寒明けける

寒波晴

楠原幹子

ふり返ること多くなり冬桜
枯るるとは軽くなること猫じやらし
理論家にもう一つのかほ鍋奉行
寒夕焼人を励ます色とこそ
耳鳴りの今日は高音寒波晴
立春大吉分厚くハムを切りにけり

温 容

秋葉雅治

湖面つひに感きはまつて結水す
山峡や錫杖なせる崖氷柱
雪のこる嶺々が壁なす新任地
月山のしろき温容春きざす
赤き根はうれん草の力瘤
春北風やスカイツリーに協和音

磯菜摘 鈴木良戈

房総の明るき訛磯菜摘
橋杭によどむ流れや猫柳

春落暉するりと闇を抜けにけり

神官の凛々しき声や節分会

節分会風さわさわと星磨く

薄氷 大畑善昭

裸木の親し気どれも吾に向く

肥り気味にて冬物の裾の端

パレットに絵の具を絞り冬青空

叩きみてこの木は舟となる冬木

白鳥の雲母のひかりこぼしゆく

薄氷はしばしの水の薄眠り

花束 上谷昌憲

花束を享くる立位置初句会

震るるや蕉郷の山高からず

四日市・桑名寒暮の雨けふる

裾のぼし蕉郷の山眠りけり

網棚に餅菓子忘れ寒見舞
伊勢志摩の炙り牡蠣には白ワイン

徒遍路 河口仁志

杖の歩に遠出すぎたる日脚伸ぶ

朝日浴ぶ手児奈堂より雪しづり

凍滝に佇ち胸襟を正しけり

走り根の瘤の浮きたる雪間かな

海女が家に遠き潮騒枇杷の花

曙光の浜辺を父子の徒遍路

常磐木 淵上千津

勸進の法螺貝透る深雪村

残り物の福を天盛り菓喰

常磐木の傷あと芽吹き粉糠雨

黙禱にはじまる集ひ寒もどり

山笑ふ吾は苦笑の物忘れ

梅にほふ最晩年の朝鏡

潮鳴集



うかうか

栗原 公子

命惜し蒨菘草の根の紅し

冬うらら平安文字にをんなもじ

挽きたての珈琲の香や雪しんしん

日向ぼこ^{谷中吟行}うかうか老婆になつちまふ

ほたる坂来て料峭の築地塀

無 冠 掛井 広通

両の手の未来も過去も悴めり

水鳥の一羽を見つむ少女の目

どの石も無冠のひかり二月来る

さみしさにこつんと当たるしやぼん玉

春眠の深海にゐて電話鳴る

浅き春

小嶋 洋子

初雪をまつりのごとく登校す

四隅てふ小暗がりあり鬼やらひ

まつ先に春の色して生花店

浅春や竹の踏切よく撥ねて

風光る切手の影のじぐざぐと

赤を極めて 福島 茂

赤い実は赤を極めて寒波来る

語部は昔むかしへ楯を足す

我が生計一反五畝の麦を踏む

雲梯に腹出す子ゐて春隣

半島の風おほらかに大根干し

沖作品



能村研三選

冬滝の行者一撃炎となりぬ
綿虫やよき明日祈るたなごころ
千本公孫樹枯るるほつえに力満つ
水底の水の韻きや冬木の芽
弟癒えよ灯下に赤き冬林檎
寒月のそば離れざる星ひとつ
終の夢美しかれや冬薔薇
辞儀させて一夜に庭を統ぶる雪
みな海に出づる安らぎ冬の川
雪椿凜と去りたし凜と生き
罅割れて一目を置き鏡餅
大凶の希少を崇め初みくじ
寒柝の遠ざかるほど闇の濃し
やはらかく踏み大寒の青畳
春まぢかレ点で返る漢詩文

茨城

岡澤 田鶴

市川市

市川市

荒井千瑳子

千葉

神戸やすを

日向ぼこして考へのまどまりぬ
向付の備前火禪寒の明け
天空樹峙つ朝や深雪晴
今日以後も余生にあらざ冬の蝶
隣席のにはかに静か卒業期
冬椿隠れの商の棄て小舟
水仙の百万本に風の径
西海の風の切干ちぢみ出す
宮守の珠と育てし寒牡丹
神木の洞十二畳冬木の芽
相輪は祈りの高さ初御空
大いなる空の下なる初山河
水天一碧犬吠埼の寒に入る
カフエラテにハートの形春の雪
置き忘れ仕舞忘れのふえ余寒

市川市

町山 公孝

長崎

水木 沙羅

千葉

座古 稔子

沖作品 15句選評

*
能村研三

冬 滝の行者一撃炎となりぬ 岡澤 田鶴

冬の滝行は聞いただけでも過酷な修行に思う。寒さが一年で最も厳しいとされる「大寒」の頃に、滝に打たれる修行に挑む。おそらくは顔や手など、露出している部分は真っ赤になることだろう。気合を入れて、手をかざしてエネルギーを受けながら修行を続ける。すると体の芯から温まってきて、身体の中央部で炎が燃える。冷たい極寒の流水の一撃をはねかえし、水蒸気を上げながら、命の炎となって燃え上がり心と体が清められる。

みな海に出づる安らぎ冬の川 荒井千磋子
東京から市川へ電車で帰ってくると、いくつもの川を鉄橋で渡る。隅田川、荒川、中川、江戸川など。これらの川はいずれ

も東京湾に流れ出する川である。山々に端を發した川の流れる時間をかけて下流へと流れきて、決して後戻りすることなく、海に向かってずっと淡々と流れていく。水量のやや減った冬の川の流れるに安らぎを感じた。

やはらかに踏み大寒の青畳 神戸やすを

「大寒の青畳」と表現したことで、柔道場の青畳を連想した。新しい年を迎えるにあたり、畳替えをしたばかりの道場の畳かも知れない。藁草の匂いもして、踏み応えも確かである。やわらかい畳の感触は素足にも馴染み心地よい。もちろん畳から来る冷えも冷たく感じるが、これも心が引き締まる。

日向ぼこして考へのまともりぬ 町山 公孝

冬の日射しを浴びてじつと暖まることほど心地良いことはない。風のない陽だまりで浴びる日射しは、ことのほか暖かく、お茶を飲んだり世間話をしたり、楽しいひと時でもある。しかし、この作者ただのんびりとしていた訳ではない。何かの構想をまとめたのかも知れない。考えがいついこの日向ぼこで纏まった。

(以下略)